

「北歐スキャンジナビア周遊9日間」旅行記

2018年7月9日(月)～7月17日(火)

フィヨルドの溪谷美に魅せられて

今回は白夜の時期にノルウェーを中心とした北歐3か国を訪ねる旅。

関西空港から初めてのエミレーツ航空317便に乗り、アラブ首長国連邦のドバイでトランジットしオスロまでの空の旅。今回もクラブツーリズムのツアーである。

添乗員は寺田律子さん。本人曰くアラカンだそう。ボーイッシュに髪を刈上げにして、しかし、髪の手入れは毎日欠かさないとのこと。参加者ははじめ24名とのことだったが1名のキャンセルがあり23名。カップルが5組、友人グループが2組残りは単独参加。ほとんどがおじさんおばさんで、唯一の若い女性は滋賀県草津からの参加者であった。

今回の旅行ではノルウェー、デンマーク及びスウェーデンの3か国に行くが、通貨がそれぞれ異なる。単位はクローネ(王冠:クラウンの意味)だが各国の為替レートは異なる。最長数日しか滞在せず、使う機会も少ないのに、チップや有料トイレには現金が必要だろうと両替。しかし、ノルウェーでは10クローネ(150円)のトイレまでクレジットカード決済だったのは驚いた。

エミレーツ航空にチェックインし、荷物の保安検査、出国審査を経ていよいよ旅のはじまり。ドバイ行の登場窓口で待機。深夜発便なので旅客は少なく混雑していない。

待合場所で女性が声をかけてきた。“ツアー受付であなた方をお見かけしたので同じツアーに参加されるのだと思うのですが、ツアー受付カウンターに忘れ物を見なかったでしょうか”とのこと。聞けば“燃料サーチャージなどで小銭を支払うときに財布をカウンターの下の台に置いたまま忘れたのではないかと思うのだが”ということだった。お金はともかくその中にスーツケースのカギを入れているので困っているとのこと。“受付まで戻って探すのは難しいですね”というので“出国審査まで受けてから戻るのはかなり面倒ではないか”と説明。寺田さんの携帯に電話するも応答なし。添乗員さんがすでに見つけてくれていることを願うばかりであった。幸い寺田添乗員が持参してくれていたので一件落着。スーツケースには予備の鍵を別に所持すべきとの教訓!

出発(1日目) 2018年7月9日(月)・10日(火)

9日出発といっても深夜の出発すぐに日付が変わって10日(火)夜を追いかけるように飛行する。空路は中国、インドを横切ってアラビア半島のアラブ首長国連邦まで。日本から北歐への直行便を使えば約11時間で行くことが出来るのに、今回の経路ではドバイまでが約10時間、ドバイ～オスロ間が約7時間、ドバイでの乗り継ぎ待ち時間の3時間を加えるとなんと20時間。ツアー代金を考えるとやむを得ないのだろうがなんとも時間の無駄なような気がしてならない。

アミレーツ航空は潤沢なオイルマネーで多くの航空機体を所有し、現時点で最大の航空機エアバス380も最も多く保有しているのであるが、我々の乗るローカル線と言える関西空港線はボーイング777という機体。しかし、設備は十分新しく、機内で見られる映画などのアトラクションも豊富である。機内食はイスラムの国らしく全てお祈り(ハラル)済みとのこと。ツアー最初の食事はチキンと玉子料理。味は悪くない。

ドバイに着く前にもう一度軽食が出る。長粒米のカレーライス風。あまりにもパラパラの米でフォークでは掬えず食べにくい。

いつものようにウトウトしたり、映画を見たりして時間を過ごす、エコノミー症候群は避けなければ。幸い大きく揺れることもなく無事にドバイへ着陸。

ドバイの空港は現地時間の早朝だということにすでに40度近い暑さ。空港では行先別にバスが待っていて移動。乗り継ぎのターミナルまではバスで10分近くもかかる広さ。あらかじめ寺田さんから“この空港は広くて迷って違うターミナルへ行ってしまうと大変なので、飛行機から降りる際には他の乗客が降りていくのをやり過ごし、全員一緒に行動して降りましょう”と注意を受けていた。ターミナルに着き人数確認をすると1名不足。個人で福井から来ていた男性Tさ

んが来ていないとのこと。そこらあたりを見回してもいないのでどうも違うバスに乗ってしまったらしい。寺田さんも要注意人物として見ていたのかやっぱりといった雰囲気。そのうちに、別の日本人ツアーに同行している添乗員から連絡が入り無事発見。やはり、別のターミナルに行っていたみたい。乗り継ぎ時間は2時間とゆっくりあったので大事には至らず済んだ。睡眠不足と時差調整でついうとうとしているうちに搭乗時刻に。

2日目 6月10日(火) ドバイからオスロへ

ドバイを朝出発してオスロ到着したのはお昼過ぎ。ドバイとオスロ間の時差は2時間なのであまり影響は受けない。入国審査を受け荷物を受け取ってバスに乗車。現地ガイドのミエコさんが待機してくれていた。

オスロ郊外の空港から30分ほどでオスロに入り、まず、エーケベルグの丘にて下車。ここからオスロ市街や港が展望できる。また、Oの口の形で知られるムンクの絵画「叫び」はここで発想されたということでそのレリーフが飾られていた。作者自身の友人と散歩中の体験がモチーフになったそうである。本物の「叫び」は他のムンクの絵画と共に国立美術館にあり、入館して鑑賞した。残念ながら色調が暗くて自分の好みではない。



ムンクの叫び

美術館の後にフログネル公園に向かう。ノルウェー出身の彫刻家ヴィーゲランの作品群がある。人間、人生をモチーフにいろんな肢体の年令、性別の人体が組み合わされた石像が公園各所に展示されている。



公園の池のそばには幾体かの子供の彫像があり、その中でも痲癩を起している子供の像(怒れる少年)が人気である。通行人が撫でていくのか、男の子の左手と彼の大事な所がこすれて光っていた。ちょっと触ってみたいくなるのであろうか。

この日の宿泊ホテル、スカンディック・アスカーに入り落ち着く。夕食はホテルでサーモンとポテト。飲み物はビールを頼んだが、北欧は物価が高くて日本の5割増しの感覚である。



食事が終わり部屋でくつろぐが窓の外は暗くならない。午後10時半ごろに日没。11時過ぎでも本が読めるほど明るさがある。何時まで明るいかわ見届けたかったのだが眠さに負けてギブアップ。翌朝気が付いた時には日の出後であった。夏至を過ぎて半月、高緯度の北欧では白夜が経験できる。

3日目 7月11日(水) オスロからバスと鉄道に乗りベルゲンへ

ビュッフェ形式の朝食は野菜果物も新鮮でおいしいし、北欧では水道水を飲んでも問題ない(水道が飲めないところでは生野菜などは危険)ので値打ちである。少し取りすぎてしまうのが難。

朝食をすませ、7時ごろにバスで出発。徐々に山岳地帯へ入っていく。山の頂近くには冬のなごりの残雪や氷河らしきものも見る事が出来る。やはり北である。ヤイロ駅に着きここでベルゲン鉄道に乗り換える。ヤイロは冬場にはスキーのメッカになるとか。駅から見える丘には多くのスキー場らしきリフトなどが見える。予定時間より10分程度遅れて到着したベルゲン行きの列車に乗り換える。1日数本程度の運行である。列車は氷河地形の湖畔にそって高度を上げていく。車窓からの景色は中々良好である。途中のミュールダール駅で支線のフロム鉄道に乗り換える。

フロム鉄道はベルゲン鉄道の建設資材を運搬する目的で海(フィヨルド)岸のフロムからミュールダールまで施設された鉄道であるそうだが今では周囲の山岳地形を楽しむ観光列車として人気のものである。途中のショースの滝が見える駅では停車して写真タイム。伝説の妖精の歌声と踊り付き。



📷ここ
拡大



妖精のお姉さんが踊ってくれているのですが、見えますか？

ショースの滝
水量の多い立派な滝です。

スカンジナビア半島は氷河期に全体が分厚い氷河に覆われていて、氷が削り残した固い岩盤で構成されている。水の流れが簡単には谷を穿つことが出来ないのだから崖を落ちるしかなく、断崖には幾筋もの滝を見ることが出来る。

フロム溪谷の眺めを楽しみながら約1時間で終点フロムの駅に着く。山に囲まれていて山中のように見えるが実はここは海岸。岸壁には10万トン以上ある大きな豪華客船が着岸して

海が十分深さがあることを示している。フィヨルドの特徴である。ここで先回りしてくれていたバスに乗り込みノルウェー第二の都市ベルゲンに向かう。

ベルゲンは北海の漁業資源の集散地として開かれた町でこの国では古い歴史がある。タラの干物や肝油を求めてドイツの商人が集まり商権益のギルドを形成していた。ドイツの航空会社の名前にも入っているハンザ同盟である。また、入り組んだ海岸線を持つノルウェーの西海岸は地元の人々に詳しいバイキングの根拠地にもなったようだ。この日の宿泊はベルゲン駅に近いGRAND TERMINUSであった。名前にGRANDと入っていても狭い部屋で（料金低い部屋をとったのか）ベッド2つを並べるとトランク整理の場所に工夫が必要なものであった。夕食はホテルの食堂でチキン料理。

4日目 7月12日（木）ベルゲンの市内を観光したのちフィヨルドクルーズへ

ベルゲンでの現地ガイドはカナコさん。朝のベルゲンは周りの山の上部に雲（霧）がかかり少し鬱陶しい出発でした。

ベルゲンは作曲家グリークの出身地としても知られている。ペールギュント組曲の「朝」などはテレビCMで使われているほどで結構有名である。さらに古くからの商人たちの家屋は世界遺産に指定されている。



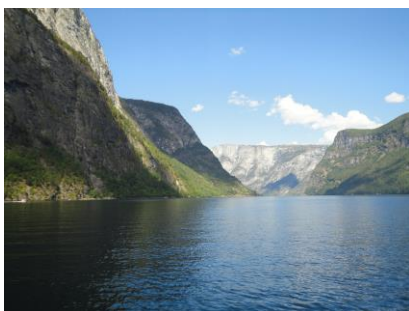
その世界遺産、ブリッゲン地区は細い路地の入り組んだ壊れそうな家の集まりで、奥にはタラの干物を模した木彫りが置いてあった。

近くには日本の鎌倉時代ぐらいの昔からある「魚市場」があって近海で捕れる種々の海産物や野菜などを売っていて、それらを食べられる店も並んでいる。しかし、どうも市場が観光客向けになっている様で、あまり地元の生産物を地産地消する市場にはなっていないように思われる。店員のやりとりも活気があって面白いところではあるが。



昼食はポーク料理

バスで移動しクルーズの出発地グドヴァンゲンへ移動。グドヴァンゲンが面しているネーロイフィヨルドは大きなソグネフィヨルドの一部（支流のさらに支流）ではあるが崖が迫った細長い海の景観は美しく、世界自然遺産に登録されている。



クルーズ船に乗って約2時間の船の旅を楽しむ。空は晴れて気持ちいい。寺田添乗員の感想。“ここが晴れてさえくれれば今回のツアーの半分は成功です。”このツアー参加者には自分も含めて晴れ男、晴れ女を自負する人が多く、実際、ツアーを通じて傘を使う場面は皆無であった。ベルゲンは雨が多いことで知られる町なのですが。

静かな海の景色は依然行ったニュージーランド南島のミルフォードサウンドでのフィヨルドクルーズを思い出すものであった。こちらの方が規模は大きい。夕食はビュッフェ形式。

前日に訪れたフロムがクルーズの終点。ここからこの日の宿泊地アイフィヨルドのホテルまでバス移動。ホテルの部屋からも海（フィヨルド）が眺められ、いい気分でした。



ホテルの部屋からの眺め

スカンジナビア半島には多くのフィヨルドが入り組んでおり、このアイフィヨルドはこの日クルーズしたフィヨルドとは別系統のものです。

でも夕景（といっても午後10時過ぎ）は幻想的

5日目 7月13日（金）オスロへもどり、大型フェリーでデンマークのコペンハーゲンへ

アイフィヨルドのヴォーリングフォス（VOERINGFOSS）ホテルを出発し、ここから前に鉄道を使って来たルートに戻るようにオスロ港に向かう。途中でホテルの名前になったヴォーリングフォスの滝に立ち寄る。滝というので見上げる岩山から落ちる水を想像していたが、滝に近づくともパッキリ大地が切れ落ちて滝を真上から眺めるようになっている。迫力はあるが結構怖い。



ヴォーリングフォスの滝

フォスは Fall：滝の意味だから正確にはヴォーリングの滝と称すべきか

落ちる滝水から立ち上る水煙に朝の光が反射して美しい。

オスロへ戻る道の脇にノルウェーの伝統、バイキングの建築様式を応用して建てられたスターブ（木造）教会があり下車して観光。キリスト教が入ってきて教会を建てる際、手近で入手できる材料で建設したものである。ソグネフィヨルドの岸にある同様のスターブ教会は「ウルネスの木造教会」として世界遺産に登録されている。



←下車観光したスターブ教会

扉や梁には木彫がほどこされており、その文様はバイキングの伝統のものでもある。すぐ隣には今風の教会が建っていて対比が面白かった。

↓の写真は世界遺産のウルネスのもの



来る時ベルゲン鉄道に乗車したヤイロ駅での休憩を経てオスロへもどる。オスロ港から夕刻に出発するDFDSのクラウン・シーウェイズ号に乗船。一晩航海して明朝デンマークへ着く。



船内に飾られていたシーウェイズ船の模型
船の大きさは3万5千トン。

同じ港に10万トン以上の豪華クルーズ船も停泊していたので小さく見えたが近づいてみると結構な大きさであった。

夕食は船内でのビュッフェ形式。品数も多くおいしそうだが二人とも胃腸の不調で控えめに。翌朝、船がデンマークに着く直前、海峡が一段と狭くなっているところに、後で訪れる予定のクロンボー城が建っている。まさに海峡を通行する船に睨みを効かせる絶好な立地である。城は海に向けて建っており海側が正面だそうだ。

6日目 7月14日(土) コペンハーゲン観光からクロンボー城

シーウェイズ船では飛行機のように大きな荷物は別の荷物室に収納されていたので、下船後我々のバスまで団体分の荷物が運ばれてくる。荷物の無事を確認してデンマークの観光へ出発。

現地ガイドはベテランの男性ガイド宮下さん。バックパッカーとして世界を回っているうちにデンマークに居ついて数十年だとか。港からすぐのところに人魚姫の像がある。デンマークの童話作家アンデルセンの代表作として有名な人魚姫の像は小ぶりで、“世界三大がっかり”と揶揄されているものではあるが、周りにはカメラを構えた観光客が多くいる。



朝の時間帯で海の方が明るく逆光で撮影がしにくい。この人魚姫にはすらっとした足がある。



また、海岸近くにあるアマリエンボー宮殿はデンマーク王室の公式な宮殿であるが、実際の

生活には便利な離宮で住まわれているようだ。中央の広場にはだれでも立ち入ることが出来るし、建物には衛兵は配置されているものの開かれた王室との印象がある。



アマリエンボー宮殿

中央の王様騎馬像の周りに並ぶのが王宮で、王様夫妻、皇太子夫妻、王女様廷が広場を取り囲むように建っている。主に儀式等で使用されている。この日は国旗が掲揚されていなかったため皆様不在。

奥の立派なドームは宮殿ではなくフレデリック教会。“こちらの方が立派だから、観光客は宮殿と間違えて写真を撮ってるよ”とガイドさんの弁

運河沿いに切妻のカラフルな建物が並んでいて、その中の建物に昔アンデルセンが住んでいたらしい。壁に銘盤が埋め込まれていた。

昼食は自分たちで食べてということなのでコンビニで購入し簡単にパンと果物飲み物で済ます。今回のツアーは経費を安く上げるためか自由食が多い。なにせ物価が高いものね！

昼食後バスで約1時間、クロンボー城に向かう。シェークスピアの名作、ハムレットの舞台になったことで有名で世界遺産にもなっている。“生きるべきか死すべきか”というやつです。



世界遺産 クロンボー城

見る方向によってその印象が異なり、朝、フェリーから見た下の写真とは違う印象のお城に見える。



さすがに人気観光地、ハイシーズンのクルーズ船からの団体客などで城内は混雑していた。観光客向けのサービスで古い時代の衣装を着けた俳優さんが王様、大公（貴族）、道化師などに扮して愛嬌を振りまいていた。俳優さんにツーショットをねだる人も。



大広間 舞踏会場



王様



海を隔てて対岸はもうスウェーデン

ちょっと古風でいい雰囲気のお城でした。

バスでコペンハーゲンに戻り、宿泊するスカンディック・コペンハーゲンホテルでフリカデッ

レ（デンマーク風ハンバーグ）なるもので夕食。



ハンバーグというより肉団子
大皿に出てきたものを取り分けてめいめいのお皿へ。素朴な料理であった。
これがツアーメンバーと一緒に食事する最後の機会であった。

7日目 7月15日（日）コペンハーゲンから国際列車でストックホルムへ

朝の列車に乗車するのでホテルの出発が6時20分、そのためホテルで朝食を取ることが出来ず、軽食弁当が配布された。

とんがり帽子のコペンハーゲン中央駅で昼食用の和食弁当が配布された。ここから普通列車でスウェーデンのマルメ駅まで。列車は指定席ではないので大荷物のトランクを持参しての移動は大変である。列車は国境でもある海峡に渡されたエーレンスド橋を渡り対岸のスウェーデンへ。あっけなく国境越え。ツアーメンバーの中には国境を越えたことを理解できてない人も。マルメ駅で高速鉄道に乗り継ぎストックホルムへ向かう。車内でお弁当を食べる。久しぶりの和食なので日本国内なら大した料理でもないのに、なぜか懐かしく、うれしい。ストックホルム中央駅が工事で使えないため少し手前のソドラ駅で列車を降り、バスでストックホルムの観光に向かう。

ここからの現地ガイドはユリコさん。スウェーデンも今年は異常気象で雨が降らずしかも高温、ストックホルムでも気温が30℃以上になっている。まず王家の離宮である世界遺産ドロットニングホルム宮殿に向かう。ドロットニングホルム宮殿はフランス式庭園を配した洒落た建物であり、ストックホルムから繋がっている大きなメーラル湖に面している。



ドロットニングホルム宮殿



幾何学的なフランス様式の庭園

このツアーで訪問した北欧の3か国（ノルウェー、デンマーク、スウェーデン）はいずれも王制を敷いているが、王族の方々と国民との距離は近いようである。王族の方が普通に街に出かけられるとか。また各国王家同士も昔から縁戚関係があり、共通の文化圏を形成している。同じ北欧の国でもフィンランドは東の方からやってきた人々（アジア系）によって出来た国で大統領制を敷いており少し毛色が違う国のように思う。



ストックホルム市街に入りストックホルム宮殿を外から観光。宮殿は修復中なのか一部覆いが掛けられていた。宮殿のすぐ前の広場は車止めこそ置いてあるが一般人が自由に立ち入れる場所になっていて、この国も王様に親しみをもって接していることが伺える。近くには大聖堂や議事堂など重要施設が並んでいる。



ストックホルムは水の都と称されるように、氷河が削った湖に囲まれ、多くの島の上に作られた都市である。また、緑も豊で美しい町である。

宮殿のある島ガムラストンには旧市街の狭い石畳の通りもあり軒を接するように建物が集まっている。しばし街並みを散策してから、この日のホテル、スカンディック・ヤルバクロックに到着。ホテルは中心街から離れていて買い物には不向きである。この夜も自由食（自分たちでどうぞ）だったので散策時に仕入れた食材で夕食とする。

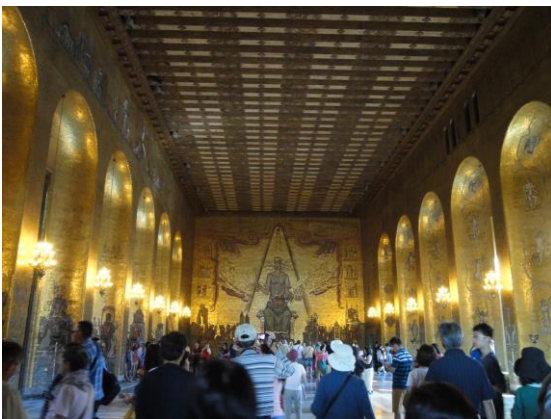
8日目 7月16日（月）ストックホルム観光の後帰国の途へ

ビュッフェ形式の朝食を終え、市内観光へ出発。

ストックホルムの市庁舎はノーベル賞の受賞者を迎えて晩餐会場になる建物で、受賞者の席の椅子にサインを残すのがしきたりとなっている。



市庁舎の中庭を抜けて湖に面した広場で記念撮影



受賞者の晩餐会場

受賞者夫妻は王族の方と一緒にこの会場に現れる

昼食後、いよいよ帰国のためブロンマ空港に向かう。ストックホルムからドバイまで約6時間、

ドバイから約9時間をかけて関西空港へ。長い飛行機の旅ではあるが西から吹くジェット気流が後押ししてくれるので来る時よりも少し早く着くことが出来る。旅の終わりはあっけなく関西国際空港へ到着。荷物を受け取り、入国審査、税関チェック。

寺田添乗員さんお疲れ様です。ありがとう。

関西空港からは娘の自家用車で大津まで。助かりました

付録 今回訪れた世界遺産

- ① ブリッゲン地区の倉庫群（ノルウェー ベルゲン）
- ② 西ノルウェーフィヨルド群 ガイランゲルフィヨルドとネーロイフィヨルド
- ③ クロンボー城（デンマーク）
- ④ ドロットニングホルムの王領地（スウェーデン）

(完)